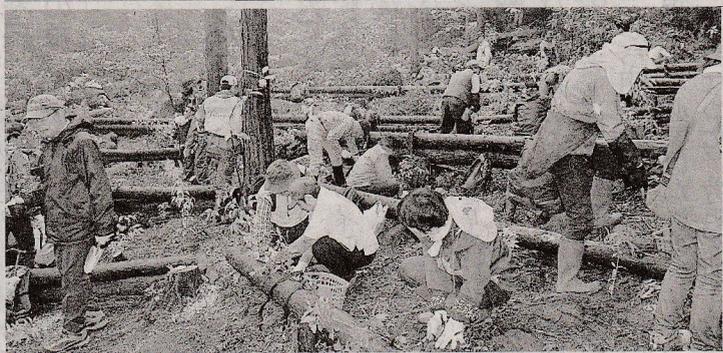


亡き夫に導かれ 植樹活動へ

ひと模様

NPO法人「地球の緑を育てる会」理事長

いしむら あやこ
石村 章子さん (81)



第19回筑波山水源の森づくりの参加者たち(5月、つくば市)

NPO法人「地球の緑を育てる会」(本部・つくばみらい市)の理事長として「筑波山水源の森づくり」をはじめ、1粒のドングリから苗木に育て、その土地本来の樹木を植える活動の先頭に立つ。

中国・大連に生まれ、戦後、母と2人で亡き父の故郷、古河市へ引き揚げた。英語が得意で、東京女子大に在学中は東京五輪で通訳を経験したことも。卒業後、日本興業銀行で外国為替の仕事に従事したが、職場結婚を機に退職。3人の子育てに追われた。

50代を迎え、子育てが一段落していた1995年。中国・内モンゴル自治区で砂漠(沙漠)の緑

化に取り組み東京都内の環境団体「日本沙漠緑化実践協会」で約5年間勤務することに。「電話番号くらいなら」と思っていたところ、3カ月後に事務局長に指名された。

園芸学の権威で、発起人として会長を務め、97歳で亡くなるまで「生涯現役」を貫いた遠山正瑛

・鳥取大名誉教授の中国視察へ同行するなか、地球規模で直面している環境危機を目の当たりにした。バブル経済の崩壊で、大量消費社会に陰りが見え始めていた時代。

「国内外で植樹活動を広め、地球の緑を未来へ引き継ぎたい。私もポリシ

の思いを強くした。ふるさとの木によるふるさとの森づくり」。この「宮協方式」の提唱者である横浜国立大の宮協名誉教授も、道しるべを与えてくれた一人。

2001年に育てる会を設立する前、「新しい団体をつくりたい」と相談

所は要らない。これからパソコンと電話があれば、どこでも仕事ができる」と迷う背中を押してくれた。

宮城県気仙沼市のカキ漁師で、「森は海の恋人」を掲げ、水源の森づくりや環境啓発に奔走した畠山重篤さんも、活動に手弁当で駆けつけるなど力を貸してくれた。

だが、当初はつくばみらい市内に確保した圃場(ほらば)で育てた苗木約7千本のうち、元気に成長したのは1500本ほど。横浜市の自宅から通う時間的な制約から、成長過程に十分に目を配ることができなかった。圃場近くへ引越し、自宅を事務所

に活動を本格化。植樹の本数は13万本を超えた。水源の森づくりなど筑波山中腹で06年から続けている植樹活動では、圃場でドングリをまき、3年ほどかけて育てた苗木をこれまでに約5万本植えてきた。今年も親子連れら約170人が参加。スタジイやアカガシなど10種類を超える常緑広葉樹約600本を植えた。

「子どもたちが大人にな

っても活動に参加してくれたら」と目を細めた。1998年に60歳で亡くなった夫隆太郎さんは「このままでは地球はもたない」と環境問題に強い関心を寄せていた。沙

漠緑化実践協会との縁に始まる草の根の活動は、隆太郎さんが「銀座で電話番程度の仕事があるみたい。やってみたら」と誘ってくれたことがきっかけで、すべての端緒は夫との出会いに行き着

いていた。主婦業第一と思っていた人生に、不思議な出会いを導いてくれた。亡き夫に尊敬と感謝の念を抱く。

日本列島が連日の猛暑に悩まされた今夏。「異常気象」とやり過ぎすのではなく、地球温暖化に対する取り組みが「待たなし」との認識が広がった。市民一人ひとりの力を信じてやまない。

「1粒のドングリが人と人をつなぎ、豊かな人間関係を育んでくれる。皆さんとこれからも手を携え、地球の未来を担う若い世代へ活動の輪を広げていきたい」(床並浩一)